

經濟論叢

第136卷 第4号

大野英二教授記念號

献 辭	山 田 浩 之	
J. ハーバーマスにおける批判的社会理論の 倫理的基盤	平 井 俊 彦	1
競争・独占・独占禁止法	越 後 和 典	22
1932年のアニュヰリ提言をめぐる覚書	丸 山 優	39
19世紀末ドイツのオリヰント認識	杉 原 達	60
第一次大戦期ドイツにおける住宅政策の展開	後 藤 俊 明	80
日中戦争前中国安徽省における茶統制政策	川 井 悟	111
リッカートとランプレヒト論争	奥 田 隆 男	130
中世イングランドの鑄貨	本 山 美 彦	149

大野英二 教授 略歴・著作目録

昭和60年10月

京 都 大 學 經 濟 學 會

リックカートとランプレヒト論争

奥 田 隆 男

はじめに

ハインリッヒ・リックカート Heinrich Rickert (1863-1936) は、その科学論上の主著『自然科学的概念構成の限界』¹⁾の序文で次のように述べている。

「私がこの著作のプランを立てた時、歴史学の独自の方法というテーマは全然流行していなかったし、この問題を専門の歴史家がまもなく論じるようになるほどとはとても予想できなかった。しかし特に、歴史家の中に、自然科学の方法を用いることによる『歴史の科学への昇格』²⁾という古くさい考えを持つ者があのようにすぐに現われるほどとは思ってもいなかった。というのも、バックルやその徒輩への信仰は、当時最終的に片づけられ、自然主義哲学においてのみ役割を演じているように思われたからである。今日、啓蒙の古くさい思弁がまたしても、歴史学における最新かつ最も重要な成果だという顔をして登場してきている。だからこそ私は、こうした考えの根底にある概念上の混乱を指摘しておくことも必要だと考えたのである。」³⁾

ここで言われている古くさい啓蒙思想の持ち主とは、この『限界』の第3章までの部分が刊行された1896年前後から、歴史学界を揺るがせ始めていた方法

1) Heinrich Rickert, *Die Grenzen der Naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*, Tübingen 1896-1902. この著作は1896年に第3章までが発表され、次いで1902年に残りの第4章・第5章が付け加えられ、さらに全体に序文が付されてあらためて一冊本として刊行されている。以下『限界』*Grenzen*と略記する。

2) この言葉は、ドロイゼンによるバックルの『イギリス文明史』H. T. Buckle, *History of Civilization in England*, London 1857-1861 批判論文の標題からとられている。Johann Gustav Droysen, *Die Erhebung der Geschichte zum Rang einer Wissenschaft*, in: *Historische Zeitschrift* (以下 *HZ* と略記) 9, 1863

3) *Grenzen*, S. V.

論争、いわゆるランプレヒト論争の当事者、カール・ランプレヒト Karl Lamprecht 1856-1915) にほかならない。後で触れるように、ランプレヒトは法則認識の学としての歴史学という方法論を提起していたのだが、リッカートはこれを歴史学への自然主義の侵入として批判すべきだと考えたのである。

本稿では、新カント派の哲学者としてのみ位置づけられることの多いリッカートの科学論の特徴の一つを、このランプレヒト論争との関連から析出することを試みてみたい⁴⁾。そのためには、しかし、ランプレヒト論争の序奏とも言うべきシェーファー＝ゴートハイン論争についてまず触れておかなければならない。

I

19世紀後半における資本主義の進展、それに伴う社会問題や社会主義の出現という現象は、伝統的に政治史こそが本来の歴史であると考えていたドイツの歴史学に対して、単純化して言えば二つの問題をつきつけることになった。一つは認識の対象領域としての「社会」Gesellschaft をどう扱うかという問題であり⁵⁾、もう一つは、自然科学の方法を模範とする立場、すなわち法則認識をもって科学的認識とする「自然主義」にどう対処するかという問題であった⁶⁾。具体的には、伝統的な政治史と文化史(文明史) Kulturgeschichte ない

4) 本稿はしたがって、限定された視角からの分析であり、リッカートの科学論の全面的な検討を意図したものではない。そのためにはとりわけデルタイとの関係が留意されなければならないが、この点に関しては、向井守「デルタイとリッカート」『文化学年報』2, 1983を参照されたい。

5) この問題に対する初期の反応として、Heinrich von Treitschke, *Die Gesellschaftswissenschaft*, Leipzig 1859. ここでトライチュケは、社会は普遍的存在としての国家に包摂されるとする立場から、社会を統一的に扱う学としての社会学の伝統的な国家学体系からの独立を認めず、さらにまた、歴史は基本的に政治史であるとみなしている。

6) 歴史認識への自然科学的方法の適用を拒否し、歴史学と自然科学の方法論的二元主義を最も早くに提起したものとして、Droysen, *a. a. O.* この二元主義の根拠になっているのは、歴史学の認識対象は自由な行為主体としての人格である、とする見解である。Droysen, *a. a. O.*, S. 15. 人格性原理とも呼び得るこの考えと先のトライチュケに見られた政治史中心主義が、その後の論争における伝統史学の立場を主に構成することになる。なお、ドロイセンの史学思想とそれのマイネッケ、ヒンツェへの影響については、岸田達也『ドイツ史学思想史研究』1976, 第一編を参照。

し社会史 *Sozialgeschichte* との対立という形態をとることになるこの問題状況⁷⁾が初めて鮮明に現われたのが、80年代末に始まったシェーファー＝ゴートハイン論争である⁸⁾。

伝統的な政治史中心の立場に立つシェーファーは、文化史という表現がポピュラーになっており、また、新しい歴史観への転換、すなわち従来の国家や政治家を中心に据えた歴史観から広汎な大衆の日常生活に眼を向ける歴史観への転換が生じているとする風潮があることは認めている⁹⁾。しかし、こうした風潮は彼からすれば歴史学の伝統への無知から生じたものにすぎない。歴史意識の発展史を回顧するならば、それは国家生活の形成と歩調を一にしていたのであり、しかも国家を形成していない民族は歴史においては何ら役割を演じてはいない¹⁰⁾。したがって、文化史の主張にもかかわらず、歴史学の本来の課題とは依然として国家の起源・生成、その存在条件・任務等を明らかにすることなのであり、個々の歴史的事件の評価基準も国家に置かれなければならない¹¹⁾。一言で言えば、歴史の本来の領域とはやはり政治史なのである¹²⁾。

文化史は大衆の日常生活に関心をそそぐ点に特色があるが、しかしそうした生活は、人間のいわば動物的側面に起源を有する低次元の欲求の充足形式にす

7) この状況に関しては、Gerhard Oestreich, *Die Fachhistorie und die Anfänge der sozialgeschichtlichen Forschung in Deutschland*, in: *HZ* 208, 1969; Jürgen Kocka, *Sozialgeschichte*, Göttingen 1977, S. 48-70. ただし本稿で扱う二つの論争においては社会史という概念は前面には出て来ず、もっぱら文化史が、政治史の対立概念として用いられている。なお、19世紀中葉における文化史・文明史の系譜については、Friedrich Jodl, *Die Culturgeschichtsschreibung*, Halle 1878.

8) Dietrich Schäfer, *Das eigentliche Arbeitsgebiet der Geschichte*, Jena 1888; ders., *Geschichte und Kulturgeschichte*, Jena 1891 (両論文共に、ders., *Aufsätze, Vorträge und Reden*, Bd. 1, Jena 1913 に所収。以下引用は本書に拠る); Eberhard Gothein, *Die Aufgaben der Kulturgeschichte*, Leipzig 1889. この論争とそれに続くランプレヒト論争を整理したものとして、Friedrich Seifert, *Der Streit um Karl Lamprechts Geschichtsphilosophie*, Augsburg 1925; Oestreich, *a. a. O.*

9) Schäfer, *Aufsätze, Vorträge und Reden*, Bd. 1, Jena 1913, S. 265

10) *A. a. O.*, S. 279

11) *A. a. O.*, S. 279

12) *A. a. O.*, S. 285

ぎない¹³⁾。歴史家はしかし人間を類の代表としてではなく何よりも人格としてとらえる。したがって日常生活に見られる大衆の同一的行動の枠組から個人が抜け出し、自らの意志に基づいた自由な行動を行なう場合にはじめて、歴史的行為と呼ばれ得るものが成立する。ある民族が全体としてこのような歴史的行為を知らず、群衆的生活しか有していない場合、この民族は民族学の対象にはなり得ても歴史学の対象にはなり得ない¹⁴⁾。したがって、日常生活の、言いかえれば「状態」Zustandの歴史としての文化史¹⁵⁾は、本来の歴史には無縁な存在なのである¹⁶⁾。

歴史的人格によって担われた歴史的行為、日常生活の次元を超えたこうした歴史的行為の連鎖を事件史と解するならば、シェーファーにおける政治史の擁護が同時に、このような事件史、さらに歴史的人格の歴史としての人物史の擁護をも伴っていることが注意されなければならない。言いかえれば、文化史が状態史として考えられる一方、政治史は常に事件史・人物史と不可分のものとしてとらえられているのがあり、しかもそうした見解はシェーファーのみならずその批判者ゴートハインにも、あるいは後で見るとランプレヒトやリッカートにも共通していたのである。

さて、ゴートハインが文化史の立場からシェーファーに批判を加えている。彼によれば現在の歴史学のあるべき姿としては、人類文明の発展過程を示すことを課題とする文化史しかあり得ない。国家生活だけを扱う政治史は、国家が文明の重要ではあるにしても一つの要素にすぎない以上、こうした課題を担い得ず、文化史に服従すべき二義的な歴史と言わなければならない。しかも文化史を参照することなしにはその存立も不可能である¹⁷⁾。

13) A. a. O., S. 265

14) A. a. O., S. 265

14) A. a. O., S. 342

15) A. a. O., S. 333

16) もちろんシェーファーも、経済史や行政史といった歴史研究の存在まで否認するものではない。しかしそれらはいくまでも、本来の歴史すなわち政治史にとっての補助的な学科にすぎない。

A. a. O., S. 283.

17) Gothein, a. a. O., S. 2f. 文明全体から見れば、国家はその一部にすぎず、したがって国家史・ノ

政治史に対する文化史の優越性はこのような対象領域の広さの面からだけではなく、方法論の面からも証明される。ゴートハインによれば、政治史の目標は何よりも国家生活上のさまざまな事件を関連づけ、同時にこの事件の当事者の動機連関を探究することにある¹⁸⁾。したがって、政治史は基本的には事件史・人物史の物語 *Erzählung* という性格を帯びる。換言すれば、政治史は総合的 *synthetisch* という方法的特徴を有している¹⁹⁾。これに対し、文化史は歴史現象を物語るのではなく、その背後で作用している諸々の力を、長期的・持続的なものと短期的・可変的なものに分け、それぞれを孤立化し、攪乱要因がなかった場合にどのような作用を示すかを把握しようと努める。この方法はゴートハインによれば分析的 *analytisch* ないし、自然科学の実験に類似しているという意味で実験的と呼べるものである。自然科学とのアナロジーを用いれば、文化史は化学あるいは物理学と同じ地位にあるが、政治史は表面的な物語にとどまっている点で自然記述に等しいものでしかない²⁰⁾。

ところで、ゴートハインによれば、文明現象の特質として、それが普遍的に存在するかあるいはしばしば繰り返されるという事実が、つまり大量現象としてあるという事実が挙げられる。したがって、政治史が個々の人物や事件ないしその連関を対象とするのに対して、文化史は何よりも大量現象を認識対象とすると言える。このことは同時に、大量現象の型 *Typus* の析出、それに基づく比較という方法的操作をも文化史が行なうということの意味している²¹⁾。

自然科学の方法＝実験を模範にした大量現象の分析という目標、あるいは、自然科学におけるヒエラルキーとの対比に基づく政治史に対する優位性の主張、

政治史の優越性は認められないとするこの立場を、文化史（文明史）を標榜する歴史家として最も早期に表明したものとして、Gustav Klemm, *Allgemeine Culturgeschichte der Menschheit*, Bd. 1, Leipzig 1843, S. 21

18) Goethein, a. a. O., S. 9

19) A. a. O., S. 11

20) A. a. O., S. 13. したがってまた「事件はそれ自身だけでは文化史にとっては無である。この事件に働いている力、理念がすべてである。」A. a. O.

21) A. a. O., S. 16

こうした点にゴートハインの文化史概念の自然主義的側面を見ることが出来る²²⁾。

このように、シェーファー＝ゴートハイン論争は、政治史対文化史、事件史・人物史対状態史、物語対分析、個的なものの認識対大量現象の認識といった対立項をそこに見い出せるという意味では、エストライヒの言うように個々の概念の明確化が行なわれなかったことは事実であるにせよ²³⁾、19世紀後半の歴史学の方法論上の問題のありかを示唆するものであったと言える²⁴⁾。しかし政治史と文化史のせめぎ合いがその頂点に達したのは、言うまでもなく、これに続くランプレヒト論争においてであった。

II

ランプレヒトは論争²⁵⁾において、自らの立場を歴史学における新しい方向と称し、古い方向と彼が呼ぶ政治史中心の立場から区別している²⁴⁾。この新旧二つの史観の相違は、彼によれば、何よりも、古い方向が歴史における個人の行動に注目するのに対し、新しい方向が状態すなわち集団的な現象に着目する点

22) ゴートハインにはこのように、自然科学的方法に則り大量現象を把握することを目指す文化史概念がある一方では、ある時代の文化現象全般の根底にある理念の把握を目指す理念史 *Ideengeschichte* としての文化史という構想もあることを指摘しておかなければならない。彼によれば「文化史の純粹形式は理念史である。」*A. a. O.*, S. 50. しかしこの二つの文化史概念を整合的に関連づける作業は、ザイフェルトも指摘しているように、なされないままに終わっている。Vgl. Seifert, *a. a. O.*, S. 12 ff.

23) Oestreich, *a. a. O.*, S. 329

24) なお、ゴートハインの他に、シェーファーを批判したものとして、Gustav von Schmoller, Rezension: E. Gothein, *Die Aufgaben der Kulturgeschichte*, in: *Schmollers Jahrbuch* 13, 1889 (Vgl. ders., Rezension: D. Schäfer, *Die Hansestädte und König Waldemar von Danemark*, in: *Schmollers Jahrbuch* 5, 1881); Ernst Bernheim, *Lehrbuch der historischen Methode*, 2. Aufl., Leipzig 1894, S. 11. 社会史に接近していたこの時期のベルンハイムについては、Oestreich, *A. a. O.*, S. 330 ff.; 岸田達也, 前掲書, 第二編第一章を参照。

25) 論争は、ランプレヒトの主著, K. Lamprecht, *Deutsche Geschichte*, Bd. 1-5, Berlin 1891-1895 の出版をきっかけにして起こった。この書物の続巻は論争による中断の後 1902 年に降刊行されていくが、その経過並びにランプレヒトの生涯と全体の業績については、上原専祿, 『歴史学序説』1958, 第二部第一を見られたい。なお、ランプレヒトの、論争中のも含む主要な論文は現在, K. Lamprecht, *Ausgewählte Schriften*, Scientia Verlag Aalen 1974, に収められている。

26) Lamprecht, *Zum Unterschiede der älteren und jüngeren „Richtungen der Geschichtswissenschaft*, in: *HZ* 77, 1896, S. 257 ff.

にある。したがって、新旧史観の対立は、新しい方向の総論としての文化史と伝統的な政治史の対立であると同時に、集団主義史観 *kollektivistische Geschichtsauffassung* と個人主義史観 *individualistische Geschichtsauffassung* との対立でもある。この旧史観はかつてのように状態を歴史記述において完全に無視するというとはなくなっているにしても、しかし依然として歴史の単なる受動的要素としてしか考えていない。つまり、地理的要因などと同様の、偉人・天才の行動の前提条件としてか、あるいは彼らの行動によって生じた一つの結果としてしか状態を考えていないのである。しかし、どんな卓越した政治家も現物経済の時代に貨幣経済の制度を自らの意志だけで創出することはできないし、どんな詩人も叙事詩の精神が支配的な時代に悲劇作家になることはできない。このことは、旧史観の考えるところとは逆に、経済的・社会的・精神的な状態が個人の行動よりも歴史の原動力として優越していること、したがって、前者こそ重視されなければならないことを示している。もちろんそれは従来重視されてきた政治史・国家史を等閑視すべきだということを意味するものではない。しかし政治史自体、状態の歴史が把握されてはじめてその正しい理解が可能になるのである²⁷⁾。

この「状態」が社会心理の面からとらえられている点にランプレヒトの史観の一つの特徴がある²⁸⁾。論争における綱領的文書とも言うべき論文「文化史とは何か」²⁹⁾において、彼はその社会心理概念を、ヴントの「創造的総合」

- 27) Lamprecht, *Das Arbeitsgebiet geschichtlicher Forschung*, in: *Zukunft* 15, 1896, S. 25 ff.
 28) 以下の行論でもわかるように、ランプレヒトの立場は極めて心理主義的色彩の濃いものである。しかし論争の初期においては彼はむしろ唯物論者として非難されていた。たとえば、Georg von Below, Rezension: K. Lamprecht, *Deutsche Geschichte*, Bd. 1-3, in: *HZ* 71, 1893, S. 466; Friedrich Aly, *Der Einbruch des Materialismus in die historischen Wissenschaften*, in: *Preußische Jahrbücher* 18, 1895, S. 211 f; Felix Rachfahl, *Deutsche Geschichte vom wirtschaftlichen Standpunkt*, in: *Preußische Jahrbücher* 83, 1896, S. 38. 他方、メーリンクは、ブルジョア史学の側からの唯物史観への接近として、ランプレヒトの『ドイツ史』を高く評価している。Franz Mehring, Rezension: K. Lamprecht, *Deutsche Geschichte*, Bd. 1 u. 2, in: *Neue Zeit* 12, 1893/94. 恐らくは、こうした動向が、ランプレヒトの心理主義への傾斜を促す一因であったと思われる。Vgl. Seifert, *a. a. O.*, S. 33
 29) Lamprecht, *Was ist Kulturgeschichte?*, in: *Deutsche Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, N. F. 1, 1896/97

schöpferische Synthese の概念から導き出している。創造的綜合とは、初発の諸要素に含まれていなかった性格が、諸要素の結合の結果として生じるといふ、心理現象に特有とされる事態を指す。たとえば、和音の聴感³⁰⁾は、和音を構成している個々の音自身には含まれてはいない。いくつかの音が集まることによつて、それぞれの音には含まれていなかった新しい性格、和音の聴感が生じるのである³⁰⁾。

ランプレヒトはこの現象が個人心理だけではなく社会心理にも生じると考えている。たとえば、世論や愛国心は、個々人の心理の単なる総和以上のものである。一般的に言えば、どの社会的サークルにおいても、個々の構成員の心理の総和だけからでは説明できない一つの社会的気分とでも言ったものが常に支配している³¹⁾。ただここで注意しなければならないのは、この社会心理の側面から社会的サークルを把握しようとする場合には、個々の構成員は、その差異によってではなく、同一性においてとらえられるということである。すなわち、旧史観の個人主義とは全く対照的に、新史観の集団主義は、人を相互に等しい類的存在としてとらえることになるのである³²⁾。

さて、社会全体の精神的態度とも言うべき社会心理が、ランプレヒトによれば、言語・芸術・科学・経済・法といったあらゆる歴史現象を包括的に規定している³³⁾。そしてこの全体性によつて、彼の社会心理概念は、たとえば物質を歴史の原動力と考えたマルクスや、知性をそうしたものとしたコント、バックルなどの、彼以前の歴史哲学の一面性を克服するものとして考えられている³⁴⁾。

ところで、個人心理研究に依拠する旧史観と社会心理研究に依拠する新史観の対立は、歴史における自由と必然の問題とも密接にかかわっている。すなわち、個人と集団の二分法と、自由と必然のアンチノミーはランプレヒトによれ

30) Vgl. Wilhelm Wurdт, *Logik*, 3. Aufl., Bd. 3, Stuttgart 1908, S. 268 ff.

31) Lamprecht, *a. a. O.*, S. 80 f.

32) *A. a. O.*, S. 82

33) *A. a. O.*, S. 106 f.

34) *A. a. O.*, S. 116 f.

ばパラレルな事柄なのであって、したがって、個人の行動は自由の王国に、集団現象すなわち社会心理は因果律の支配する必然の王国に属することになる³⁵⁾。そして、科学が因果律の認識である以上は、因果律の支配に服さない偉人・天才の個的かつ自由な行動はせいぜいで芸術的直観の対象にしかなり得ない³⁶⁾。これに対して、因果律が支配する社会心理は当然科学的認識が可能である。したがって、歴史における自由と必然のアンチノミーの存在を認める以上は、集団現象から突出した個人的行動を認識対象の中心に据える旧史観の歴史記述は芸術的叙述でしかなく、他方社会心理に着目する新史観はその科学性を誇れることになるのである³⁷⁾。

しかし、ランプレヒトが考えている因果認識とはどのようなものなのだろうか。それを見るためには、社会心理の発展法則とされているものを検討しておかなければならない。

この法則は二つの系から成っている。一つは、社会心理の発展段階論としての文化時代 Kulturzeitalter 概念である。各民族の歴史は基本的には、象徴主義 Symbolismus, 類型主義 Typismus, 慣習主義 Konventionalismus, 個人主義 Individualismus, そして主観主義 Subjektivismus という五段階の、それぞれ統一的な社会心理によって支配される文化時代を経過すると考えられている³⁸⁾。この過程は、一個の生命体がその誕生から死に至るまでの間に、少年期・青年期・成年期・老年期といった時期を必ず通過するのと同様に、必然的・合法的な過程なのである³⁹⁾。

もう一つの系は、心的強度増大の法則とも呼び得るものである。すなわち、文化時代の各段階を通して常に、後の時代の社会心理は前の時代のそれよりも強度においてまさっているという法則である。たとえば、貨幣経済は現物経済

35) A. a. O., S. 103

36) A. a. O., S. 104

37) A. a. O., S. 87

38) A. a. O., S. 128

39) A. a. O., S. 136

よりも強度な心的努力を含んでいる⁴⁰⁾。そしてこの法則の結果として、原初、未分化であった社会心理の諸要素が、次第に独立・分化していくと考えられている。言語や経済が社会心理の最も古い層と言えが、初期の社会においてこうした層に埋没していた芸術・科学あるいは道徳・法がこの法則に従って漸次分化していく⁴¹⁾。同時に、こうした社会心理の諸要素の分化は、社会集団の分化をも伴っている。つまり、原初の生殖共同体からやがて家族や民族あるいは国家が、さらにまた身分や階級といった集団が分化・形成されていく過程も、ランプレヒトによれば社会心理の強度増大の法則の帰結の一つなのである⁴²⁾。

しかし、ランプレヒトがここで述べている法則は、経験的な検証の試みが行なわれた上で提示されているのでもなければ、これから検証されるべき仮説として提示されているのでもない。せいぜいで生命体とのアナロジーが援用されているにすぎない⁴³⁾。つまり、歴史における必然的因果系列としての法則を設定することがランプレヒトにとってはそのままその証明になるのであり、ひいては歴史における因果認識の課題も果され、彼の新史観の科学性も保証されることになるのである。科学的認識とは因果認識であり、因果認識とは法則認識にほかならないとする自然主義が、ランプレヒトにおいては、心理主義化された一つの極端な形態をとったと言わなければならないだろう。

さて、ランプレヒトのこうした新史観の方法論に対する批判は、歴史法則の

40) A. a. O., S. 132

41) A. a. O., S. 140

42) A. a. O., S. 141 f. このような、社会心理一元論とも言うべき立場に立つランプレヒトからすれば、階級・身分の形成・発展を歴史考察の中心に据える社会史は、科学・芸術といった精神的現象を包摂し得ないが故に、不十分なものでしかない。Lamprecht, Über die Entwicklungsstufen der deutschen Geschichtswissenschaft, in: *Zeitschrift für Kulturgeschichte*, N. F. VI, 1897, S. 39 ff.

43) 「必然性すなわち社会心理の諸々の力は、順次現われる文化時代の概念を媒介にすることで、因果系列に整序することができる。これの証明は、文化時代の系列が、正常な発展を行なったどの国民においても同じ順番で現われるという事実によってもたらされる。だから、文化時代の系列の根底には、因果的に展開される普遍的な動機 *Motiv* があるに違いない。……ちょうど、植物の成長の諸局面にそうした動機が与えられているのと同様に。」Lamprecht, *Der Ausgang des geschichtswissenschaftlichen Kampfes*, in: *Zukunft* 20, 1897, S. 206

問題と、個人心理と社会心理の関係の問題の二つに集中している。

前者を扱ったものとしてはベロウの論文が挙げられる⁴⁴⁾。彼はシェーファー同様に、歴史学は人間の行動を個性を持った人格の行動としてとらえるものであり、その意味で依然として個人主義的であるとする立場から⁴⁵⁾、人間を類の観点からしか見ない自然科学の方法と歴史学の方法とは根本的に異なると考えている⁴⁶⁾。歴史学において普遍的とも言える真理があるとすれば、それは、国内の生活は大部分外交関係に依存しているというランケの命題であり、これに比べれば、経済学者や社会学者のどんな発見もその学問的意義において劣っている。しかもこのランケの命題からすれば、民族の運命はその時々との対外関係によって決せられる以上、どの民族も他の民族と等しい普遍的・合法的な発展行程をたどるというランプレヒトの想定が不可能であるのは明らかである⁴⁷⁾。ベロウによれば、歴史には法則がないという事実の認識も、歴史観察の効用の一つなのである⁴⁸⁾。

個人心理と社会心理の関係については、まずマイネッケが、ランプレヒトの偉人=自由、集団=必然という分類は、少数の貴族エリートと類的な動機に盲目的に従う愚鈍な大衆という一種のエリート主義史観につながるものだという批判を加えている⁴⁹⁾。しかし、より注目すべきなのは、ヒンツェの論文である⁵⁰⁾。これは、論争の過程で、ランプレヒトを限定付きながらも評価した、ドイツの歴史家による唯一の論文と言えるものである。

ヒンツェもマイネッケ同様、ランプレヒトが行なった社会心理と個人心理の

44) Georg von Below, Die neue historische Methode, in: *HZ* 81, 1898

45) *A. a. O.*, S. 247

46) *A. a. O.*, S. 245

47) *A. a. O.*, S. 245

48) *A. a. O.* なお、このベロウと同様の立場のものとして、Eduard Meyer, Zur Theorie und Methodik der Geschichte, 1902, in: ders., *Kleine Schriften*, Halle 1910, S. 36 ff. 森岡弘道訳『歴史は科学か』1965, 42頁以下。

49) Friedrich Meinecke, Erwiderung, in: *HZ* 77, 1896, S. 263 f. なおこれに関しては、吉武夏男「ランプレヒト対マイネッケ『史学論争』」、『史学研究五十周年記念論叢』1960所収を参照。

50) Otto Hintze, Über individualistische und kollektivistische Geschichtsauffassung, in: *HZ* 78, 1897

単純な二分法は認め難いとしている。社会心理といえども結局は個人心理に由来するものであり、その本質からして異なっているわけではない。歴史の生起とは、個人心理とそれの集会的・共同的動機複合体としての社会心理の相互・共同作用の産物にほかならない。したがって個人心理と社会心理の単純な二分法が通用しない以上、個人主義史観対集団主義史観あるいは政治史対文化史という対比も誤っていると言わなければならない⁵¹⁾。

こうした批判にもかかわらず、歴史学が幅広い社会心理研究を基礎にしなければならないという点ではヒンツェはランプレヒトに賛同している。社会心理への着目において、ランプレヒトはランケに比べて一つの進歩を示しているのである⁵²⁾。

このヒンツェを例外とすれば、ランプレヒトに対する積極的な評価はドイツ歴史学界の外部からしか来なかった⁵³⁾。その一例がアンリ・ピレンヌである⁵⁴⁾。ピレンヌによれば、現在の社会科学の成果を考えるならば、歴史を政治史に還元してしまったり、あるいは集团的・無意識的要素を無視したりすることはもはや不可能である。ランプレヒトの新史観も歴史を社会科学の観点から考察する試みなのである⁵⁵⁾。もちろん、歴史学が社会学や社会心理学と混同されるべ

51) A. a. O., S. 66

52) A. a. O., S. 62, S. 66 ヒンツェはまた、諸民族の規則的な発展の自然的傾向があることも認めている。しかしそれは民族の初発の時期に限られる。民族が諸民族・諸国民の交錯の場としての世界史の過程に巻き込まれた時には、この傾向はもはや買けないものになる。A. a. O., S. 66 f. 一方向での社会史への志向と、他方での新ランケ派的志向の間で揺れていたこの時期のヒンツェの立場を示すものとして、Hintze, Roschers politische Entwicklungstheorie, in: *Schmollers Jahrbuch* 21, 1897

53) 社会学者としては Paul Barth, *Philosophie der Geschichte als Soziologie*, Leipzig 1897, S. 216 f. シュモラーもまたこの時期ランプレヒトに好意的であった。Vgl. Gustav von Schmoller, Zur Würdigung von Karl Lamprecht, in: *Schmollers Jahrbuch* 40, 1916, S. 1114 ff. シューファーゴートハイン論争にも見られた伝統史学に対するこうした批判的姿勢を考えるならば、シュモラーの歴史主義は、伝統史学及び後に見るようにそれに近い立場にあるリッカートの歴史主義から明確に区別されなければならないと思われる。ペロウは社会学者や経済学者にこのようにランプレヒトの側に立つ者がいたことから、この論争を一面では社会学・経済学と歴史学の論争であるとさえみなしている。Below, a. a. O., S. 194 ff.

54) Henri Pirenne, Une polémique historique en Allemagne, in: *Revue historique* 64, 1897

55) *Op. cit.*, p. 54

きではない。社会学や社会心理学は歴史進化の内的原因の発見の手助けにはなるにしても、最終的には歴史学自身がそれを経験的な作業によって発見しなければならない。しかし、歴史学と社会科学の区別が厳守されなければならないにしても、歴史学にとっては、今日、社会科学の理論に助けられた仮説形成は不可欠であり、その上で史料批判に基づく実証研究がなされなければならないのである⁵⁶⁾。

ビレンヌのこの論文は、歴史認識における社会認識の不可欠性を強調し、しかもランプレヒトのように自らが立てた法則の実体化に陥ることはなく、仮説としての社会理論の援用の必要性を説いている点で、論争のどの当事者の論文よりも、歴史学につきつけられた問題の所在を的確に指し示したものであると言える。しかしドイツ本国においては、ランプレヒトが自らの勝利のしるしとして引き合いに出した以外にはほとんど反響を呼ぶことはなかった⁵⁷⁾。そして、ランプレヒトに対する批判が集中する中で、伝統史学の側に立って論争の哲学的決算の試みを行なったのがリッカートの『限界』である。

III

周知のように、リッカートはヴィンデルバントの法則定立的科学と個性記述的科学という二分法⁵⁸⁾を受け継ぎ、一般化的認識としての自然科学と個性化的認識としての歴史学という区分を軸にその科学論を展開している。彼によれば、自然科学、歴史学のそれぞれ固有の対象をア・プリオリに指定することはできない。ある対象に関して、その普遍的な側面、すなわち他の対象との共通面が着目され、その法則性が探究されるとき、自然科学の認識対象としての「自然」が指定され、他方、この対象の個性の探究がなされるとき、歴史学の認識

56) *Op. cit.*, p. 56

57) Lamprecht, *Der Ausgang des geschichtswissenschaftlichen Kampfes*, in: *Zukunft* 20, 1897, S. 195 ff.

58) Wilhelm Windelband, *Geschichte und Naturwissenschaft*, Straßburg 1894, S. 12

対象としての「歴史」が措定される⁵⁹⁾。ただし、対象の個性とは、認識主観の有する価値との関係づけ、すなわち「価値関係」Wertbeziehung に基づいて選択されるものである⁶⁰⁾。このようにして形成された対象が、歴史認識の固有の対象としての「歴史的個体」historisches Individuum と呼ばれる⁶¹⁾。

学が性格がこのように認識対象によってではなく方法によって規定されるという意味で、リッカートの科学論は方法論的と言うことができる。そして個性に着目する点が歴史学の方法の特質とされる以上、歴史における集団現象の優越とそこでの構成員各人の同質性を強調するランプレヒトは当然批判されることになる。

「自然科学の方法に従って、歴史的個人を類概念の見本としかみなさず、……諸個人を『集団現象』として扱い集団の中に解消させるどんな試みも、対象を原子の組み合わせとしかとらえないあの啓蒙思想と極めて近いものである。この思想には、一回限りのもの、特殊なもの、意義深い特性、こういったものへのどんな理解も欠けている。自然科学的見地にとってのみ、人間社会は相等的な原子的存在の複合体になるのである。」ランプレヒトの言う旧史観が現実にはずっと以前に、歴史学におけるこうした原子論を克服しているのであって、その意味では、ランプレヒトの新史観こそがむしろ古くさいのだと言わなければならない⁶²⁾。

しかしリッカートも、集団現象を歴史学の対象から完全に排除するわけではない。むしろ実際の歴史記述にはそうした要素が絶えず入ってくることを認めている⁶³⁾。しかし、この場合の集団概念、たとえば階級や身分といったものや、構成員各人の個性ではなくてその共通性が着目された結果形成されたものであるから、やはり自然科学的観点の産物と言わなければならない。個人や事件の

59) Heinrich Rickert, *Grenzen*, S. 255

60) *Grenzen*, S. 351

61) *Grenzen*, S. 355

62) *Grenzen*, S. 405; Vgl. *Grenzen* S. 504

63) *Grenzen*, S. 486

個性に着目して形成される。歴史学の本来の認識対象である歴史的個体を絶対的歴史概念と呼ぶならば、歴史学における自然科学的構成部分とも言うべき集団概念は、それとは峻別されるべき相対的歴史概念なのである⁶⁴⁾。

この二つの概念の名称そのものが、リッカートが人物史・事件史を重視し、集団現象に二義的な役割しか与えていないことを示しているが、それは偉人と環境の関係を論じた次の文章により明白に現われている。

「偉人の個性はその環境の個性と完全に一体化することはあり得ない——そうなると同一の『時代精神』は全く等しい諸個人しか生み出さないことになるだろうから——。むしろ個々の偉人が彼らの個性的特質をその環境あるいは時代に刻印することの方がずっとあり得ることである。なぜなら彼らは示唆し、影響を与え、そして模倣されるからである。だから、歴史学は時代精神を理解するためには、何よりも『指導的人物』の個性を探究し、そして純個人的なものがどのようにして次第に大衆にまで行きわたるかを示さなければならない。」⁶⁵⁾

絶対的歴史概念と相対的歴史概念の区別は政治史と経済史に対しても適用されている。

「歴史学にとっては、ある史的発展系列の自然科学的概念の部分、たとえば経済史的的事象が、絶対的歴史概念に属する対象、たとえば政治的事件によって、何ら本質的な影響を被らないと考えるのは不可能である。」⁶⁶⁾

こうして人物史や政治史の優位性が、絶対的歴史概念によって確認される一方、ランプレヒトが法則認識と同一視した因果認識の問題においても、自然科学の方法と歴史学の方法を峻別する立場が貫かれている。

リッカートは因果律に関して三つの概念を区別している。第一の概念は、す

64) *Grenzen*, S. 488 ただし、集団全体の個性に着目されている点では依然としてそれは歴史概念である。したがって、自然科学的構成部分が歴史記述の中に存在するからといって、自然科学の方法の歴史学への適用が正当化されるわけではない。S. 495

65) *Grenzen*, S. 500

66) *Grenzen*, S. 524

すべての事象はその原因を有しているという意味で因果原理と呼ばれる。第二の概念は、個々の事象における原因と結果との結びつきはそれ自体個性であるという事態を表わすもので、歴史的因果連関と呼ばれる。第三の概念が、個々の因果連関の共通性に着目して形成される普遍的な因果連関、すなわち因果法則である⁶⁷⁾。したがって、あらゆる事象が因果原理の支配に服するとは言っても、実際に学的認識の対象となるのは第二の個性的因果連関すなわち歴史的因果連関か第三の因果法則かどちらかである。そして前者が歴史学の認識対象として後者が自然科学の認識対象として規定されることによって、因果認識を法則認識と同一視しそのことから新史観の科学性と法則認識を認めようとしなない旧史観の非科学性を主張しようとしたランプレヒトの立場はその根拠を失なうことになる。言いかえれば、学の存立条件として因果認識の必要性を認めつつ、歴史学におけるそれを、個性的な原因から個性的な結果が生じる一回限りの個性的因果系列の認識として、自然科学的な法則認識から区別することによって、リッカートは、一方では歴史学への自然主義の侵入を防ぎつつ、他方では個性化的認識としての歴史学の科学性を守ろうとしたのである。

ところで、先にも述べたように、歴史認識は価値関係によって導かれる。しかしこの価値の選択が歴史家の恣意に終らないためには、価値自体が、歴史家が属する文化共同体において普遍的に妥当する価値すなわち普遍的文化価値でなければならない⁶⁸⁾。そしてこの文化価値に関係している対象こそが歴史認識の本来の対象になる。とりわけ、この価値に能動的にかかわり合う人間とその活動が「歴史の中心」historisches Zentrum と呼ばれる⁶⁹⁾。

しかし歴史学とはあくまでも変化、発展に関する学である以上、自らの社会内での普遍的な文化価値に基づいて活動する人間集団があったとしても、彼ら

67) *Grenzen*, S. 413 ff.

68) 普遍的というのは、リッカートによれば、単に万人に共通するというのではない。たとえば飢えや性衝動の充足は、それ自体は万人に共通する事柄ではあるが、その実現が個々人の要件にすぎない以上、普遍的価値とは呼べない。そうであるためには、その実現自身も共同体の構成員全員の共同の事柄でなければならない。*Grenzen*, S. 575 f.

69) *Grenzen*, S. 561 f., S. 578

が何の発展も示さないならば、歴史認識の対象にはなり得ない⁷⁰⁾。いわゆる文明民族と未開民族の差異はこうした発展の有無にあり、したがって後者は当然歴史学の対象からは排除される⁷¹⁾。言いかえれば、未開民族の認識を目標とする人類学は歴史学とは無縁だとされているのである。

同様に社会学も歴史学とは峻別される。一般的な意味での文化現象を対象とする点では両者は共通している。しかし、社会学は価値関係によらず、社会の構成員をその同質性においてとらえようとしている点で明らかに自然科学的方法をとっていると言わなければならない。歴史学が文化の個性的側面に着目するという意味で歴史的文化科学と呼べるとすれば、社会学は自然科学的文化科学と呼ぶことができる⁷²⁾。両者が根本的に異質な学問である以上、歴史学を社会学によって置きかえようとする試みは、個性的なものへの関心に対する非学問的圧制であり、科学の貧困化を招くものと言わなければならない⁷³⁾。

社会心理学も自然科学的方法に依拠しているが故に、歴史学とは排除し合うものである。とりわけ、個々の偉人が歴史に対してどのような意義を有しているかというすぐれて歴史的な問いに無関心であることに、社会心理学の歴史学との疎遠性が示されている⁷⁴⁾。

これまで見てきたところから明らかなように、リッカートの科学論は基本的

70) *Grenzen*, S. 579

71) *Grenzen*, S. 580

72) *Grenzen*, S. 589 f.

73) *Grenzen*, S. 595 デルタの精神科学概念も、その対象が「歴史—社会的實在」*geschichtlich-gesellschaftliche Wirklichkeit* と規定され、人間、社会、歴史に関する諸科学を統一する原理がそこで探究されていることで、社会学と歴史学の論理的差異を無視するものとして批判されている。*Grenzen* S. 294. Vgl. Wilhelm Dilthey, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, 1883, in: ders., *Gesammelte Schriften*, Bd. 1, Göttingen 1973, S. 4 f. 『限界』の1896年に発表された部分にすでに見い出される、社会学を蔑視するリッカートの態度は、当然社会学者の反論を招くことになった。たとえば、歴史認識にとっても社会の一般理論が不可欠とするテニエスからすれば、リッカートの所論は結局歴史特に政治史を人物史から説明しようとするものでしかない。Ferdinand Tönnies, *Zur Theorie der Geschichte*, in: *Archiv für Philosophie*, II. Abt. *Archiv für systematische Philosophie*, N. F. 8, 1902, S. 15, S. 26. Vgl. Paul Barth, *a. a. O.*, S. 4 ff.

74) *Grenzen*, S. 547

には排除の論理に拠っていると言うことができる。ピレンヌが社会認識の歴史認識への摂取の必要性を強調したのとは全く対照的に、リッカートにおいては両者の方法原理の異質性を際立たせることがむしろ目論まれている。そして、一般化的=法則認識としての自然科学と個性化的認識としての歴史学という方法論的・二元主義の立場からの自然主義批判が徹底されればされるほど、19世紀後半に顕在化してきた対象領域としての社会の認識の問題は、自然科学的方法をとる社会科学の問題として、原理的には歴史認識から排除される結果になったのである。集団現象が歴史記述に入り込むことが認められる場合でも、それには相対的歴史概念という二義的な地位しか与えられず、他方絶対的歴史概念や歴史的因果連関の概念によって、政治史・人物史中心の伝統史学の立場が擁護されることになったのである。コッカは第一次世界大戦に至るまでのドイツ歴史学界の傾向を、社会認識の課題を歴史認識へ取り込もうとした社会史の潮流の学界からの駆逐過程として総括しているが⁷⁵⁾、方法論的・二元主義の立場から、ランプレヒトに代表される自然主義への批判に名を借りつつ伝統史学を擁護したリッカートの『限界』はその哲学的象徴であったと言うことができよう。

お わ り に

マックス・ウェーバーの社会科学方法論に対するリッカートの影響がしばしば言われている⁷⁶⁾。しかし自然主義をリッカート同様拒否しつつも、「歴史派経済学の門弟」⁷⁷⁾として出発し、方法論に関するいくつかの論文での試行の果てに、理解社会学という方法意識に辿りついたウェーバーと、歴史学と社会科学の方法論的差異を強調することで結果的には社会認識の課題を歴史認識から原理的に排除したリッカートとは、問題関心自体に本質的な相違があったと

75) Jürgen Kocka, *a. a. O.*, S. 57f.

76) この影響を強調した最近のものとして、Thomas Burger, *Max Weber's theory of concept formation*, Duke University Press 1976

77) Max Weber, *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik*, 1895, in: ders., *Gesammelte politische Schriften*, 3. Aufl., Tübingen 1971, S. 16. 田中真晴訳『国民国家と経済政策』1959, 42頁。

言わなければならないだろう。しかしこの相違を、ウェーバーの方法論の展開に即して具体的に明らかにすることは本稿の範囲を超える課題であり、別の機会に委ねられなければならない。